

## 1. 導入

提案以来、転送(Transfer)の適用は位相に関連付けられて定式化されてきており、派生の循環性を保証するその理論的役割は現行の極小主義の枠組みに於いても維持されている。従って、位相がどのように定義されるかが問題となるが、Chomsky (2007)の採る命題性に基づく定義も、その代案となる収束性に基づく定義も、詳細に検討すると理論的・経験的問題に直面することが明らかとなる。そこで本稿では逆に、転送が原始概念であり、その適用に基づいて位相が定義されるという可能性を追求する。特にここでは、転送が原理的には自由に適用可能であるという(1)の主張に基づく体系の構築を試み、その妥当性を示すことを目的とする。

### (1) Transfer applies freely.

しかし経験的事実からすると、実際に転送が可能なのは特定の場合に限られねばならない。これには2つの要因が考えられる。1つは、適用が不適格な結果を生じることであり、もう1つは当該の統語体がそもそも転送の定義域に無いことである。言い換えれば、転送の適用はその出力または入力によって実質的に制限され得る。

## 2. 転送の挙動と再統合

伝統的に、転送は特定の統語体を統語派生から取り除き、インタフェイスへと送り出す操作だと考えられてきたが、この見解は Collins and Stabler (2016)が「組み立て問題(assembly problem)」と呼ぶ問題を提起する。つまり、転送済みの構造は未転送の構造に如何に結び付くのかという問題である。この問題に対し、本稿では Nunes and Uriagereka (2000)、Maezawa (2019)らの提案する解決法を採り、転送は構造を転送領域へと文字通り「分解」し、それが後統語的過程によって単一の表示に組み立て直されると仮定する。より具体的には、Maezawa (2019)に従い、後統語的操作「再統合(reintegration)」を採用する。この操作は(2)–(3)のように定式化され、適用に当たっては、貼票(label)が「糊代」として適用対象を特定する役割を果たすことになる。そして、再統合が(2)–(3)のように行われるなら、転送も(4)のように再定式化する必要がある。

(2) *Reintegration*: A fragmentary representation  $\rho$  may be reintegrated into a terminal  $\tau$  in another fragmentary representation iff [f]  $\text{Label}(\rho) \subseteq \tau$ . (Maezawa (2019: 272))

(3) *Reintegration of  $\rho$  into  $\tau$*

a. Substitute  $\text{Label}(\rho)$  with  $\tau$ :  $\{\rho \dots, \{\text{Label}(\rho), \{\dots\}\}, \{\dots, \{\tau, \{\dots\}\}\} \rightarrow \{\rho \dots, \{\tau, \{\dots\}\}, \{\dots, \{\tau, \{\dots\}\}\}$

b. Substitute  $\tau$  with  $\rho$ :  $\{\rho \dots, \{\tau, \{\dots\}\}, \{\dots, \{\tau, \{\dots\}\}\} \rightarrow \{\dots, \{\rho \dots, \{\tau, \{\dots\}\}\}, \{\dots\}\}$  (cf. *ibid.*: 273)

(4) *Transfer*: Transfer applies to an SO  $\alpha$  to send  $\alpha$  to  $\Sigma$  and  $\Phi$  and replace  $\alpha$  with  $\text{Label}(\alpha)$  in NS.

以上の前提の下で、次節では転送の適用がその出力及び入力によって制限される場合を順に見る。

## 3. 転送の適用を制限する要因

前節で見た体系の下では、貼票は少なくとも統語的・後統語的派生に於いて必要となる。後に再統合を受けるために、転送領域は貼票可能でなければならず、つまり、転送の適用は貼票可能性により制限を課される。

Chomsky (2021)は、操作一般の適用対象を選択する操作  $\Sigma$  の存在を主張しているが、その挙動はどのように定式化できるだろうか。統語体  $\alpha$  を探索領域とすると、 $\Sigma$  はその根から下方に構造を探索するが、特定の特性を持つ語彙項目(lexical item, LI)  $K$  を検出すると、そこで探索を止してそれ以上深い構造の探索は行わない。このとき、 $K$  を「 $\Sigma$  にとって阻止的(arrestive)」だと言うことにする。阻止的 LI は、その姉妹及び姉妹の項へのアクセスを阻む。更に、阻止性とアクセス可能性(accessibility)、選択可能性(selectability)は互いに独立の特性と考えよう。(5)で、 $\Sigma$  にとって  $K$  が阻止的なら  $\alpha \cdot \beta \cdot \gamma \cdot X \cdot Y \cdot K$  はアクセス可能であり、かつ選択可能な場合のみ出力の候補となる。一方、 $\delta \cdot Z$  はアクセス不可能なので、選択可能か否かを問わず出力とはならない。

(5)  $\{\alpha X, \{\beta Y, \{\gamma K, \{\delta Z, \dots\}\}\}\}$

また、 $\Sigma$  の挙動はそれが何に与えるかにより同一ではない点も重要であり、ここでは(6)を提案する。

(6) a. Features that have no interpretable counterparts are  $\kappa$ -features.

i.  $\kappa$ -features enter the derivation “locked.” Locked  $\kappa$ -features need to be “unlocked” to be valued.

ii.  $\kappa$ -features are unlocked by being referred to as labels when Transfer applies.

iii. Uninterpretable features other than  $\kappa$ -features are regarded as intrinsically unlocked.

b. Only LIs with unvalued  $\kappa$ -features provide labels. c. An LI is arrestive to LA unless it has a valued  $\kappa$ -feature.

d. An LI is arrestive to  $\Sigma_{TF}$ , which provides an input to Transfer, unless it has an unlocked feature.

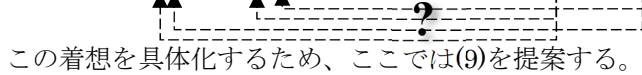
#### 4. 再統合に於ける曖昧性: 二重ヲ格制約

以上で提案した体系は、その下でのみ予測される制約の存在によって支持されるが、ここでは、日本語の二重ヲ格制約(Double-*O* Constraint, DOC)がその例だと主張する。(7)に見るように、被使役者は、埋め込み動詞がヲ格目的語をとらない場合は二格・ヲ格の交替を示すが、とる場合には二格でのみ標示可能である。

- (7) a. 太郎は花子{に/を}歩かせた。 b. 太郎は花子{に/\*を}本を読ませた。

本稿の体系の下では、DOC は次のように率直に理解される。つまり、もし上位の単一の転送領域が終端要素として同じ格を担った D を 2 つ含むなら、(8)に示すように、再統合の段階で転送済みの 2 つの DP のどちらをどちらの D に再統合すべきか決定できず、このことが派生を破綻に導くと考えられる。

- (8) [[... [D を] ... [D を] ...] √読ませ-, [[花子] DP], [[本] DP]



この着想を具体化するため、ここでは(9)を提案する。

- (9) a.  $\kappa$ -features on  $v$  are conjugation (Conj) features. b. A Conj feature can realize as a morpheme that morphologically “close off” its verbal base; a verbal base cannot occur as a independent word in its absence.

(9)の下では、(10a)の VP 構造は(11)のようになる。基体動詞は使役化接辞-sase と強く結合しており、形態的独立性が低い。このことは(10b)に対して(10c)の容認度が低いことによって支持される。従って(10)で動詞語根「√食べ-」を選択する  $v$  が  $\kappa$  素性を欠くのにに対し、-sase を選択する  $v$  はそれを担うと考えられる。

- (10) a. 太郎が花子にリンゴを食べさせた。 太郎が花子にリンゴを食べ{b. させはした/c. ?\*はさせた}。

- (11) [<sub>VP</sub> 太郎 [[花子 [<sub>VP</sub> t<sub>i</sub> [[リンゴ]<sub>j</sub> [t<sub>j</sub> √食べ-]] v<sub>[+CAP]</sub>]] -sase]] v<sub>[+CAP, <κ>]</sub>] (<κ>: a locked  $\kappa$ -feature)

一方で、 $\kappa$  素性を担うか否かは  $v$  の格付与特性とは直接関係が無く、2 つの  $v$  は何れも格付与特性を持つ。

以上を前提に、DOC が如何に導かれるか見てみる。主題 DP が完成すると(12a)のように直ちに転送が適用される。(12b)のように語根が併合されてしまうと、解錠された素性を持たない語根は ΣTF にとって阻止的なため、その姉妹は転送の定義域から外れる。また、構造全体を転送することもできない。LA にとって唯一アクセス可能な語根は未付値の  $\kappa$  素性を持たず、転送後に貼票が残らないからである。

- (12) a. [[リンゴ] D<sub>[<κ>]</sub>] b. [[[リンゴ] D<sub>[<κ>]</sub>] √食べ-<sub>[ ]</sub>]

語根が併合された後、(13a)のように低い  $v$  が導入される前に転送を適用することは不可能である。(13b-c)に示すように、残される貼票は D であるため語根が  $v$  に繰り上がれず、適格な形態が得られない。

- (13) a. [D<sub>[κ]</sub>] [<D> √食べ-<sub>[ ]</sub>] —Transfer→ b. D<sub>[κ]</sub> c. [D<sub>[κ]</sub>] v<sub>[+CAP]</sub>

また、低い  $v$  が導入された直後に(14a)のように構造全体、または(14b)のように  $v$  の姉妹を転送することもできない。主題 D の  $\kappa$  素性は既に付値されているため貼票が残らず、後に再統合に失敗する。

- (14) a. [[D<sub>[κ]</sub>] [<D> √食べ-<sub>[ ]</sub>] v<sub>[+CAP]</sub>] b. [[D<sub>[κ]</sub>] [<D> √食べ-<sub>[ ]</sub>] v<sub>[+CAP]</sub>]

では、被使役者が併合された後ならどうだろう。構造全体の転送すると、(15a)のように貼票として被使役者 D が残り主要部移動が適用できない。また、(15b)の  $vP$  の転送も貼票を残さないため不可能である。

- (15) a. [[[花子] D<sub>[<κ>]</sub>] [[D<sub>[κ]</sub>] [<D> √食べ-<sub>[ ]</sub>] v<sub>[+CAP]</sub>]] b. [[[花子] D<sub>[<κ>]</sub>] [[D<sub>[κ]</sub>] [<D> √食べ-<sub>[ ]</sub>] v<sub>[+CAP]</sub>]]

最後に、(16)示す被使役者 DP の転送は、正に(8)のような曖昧性を生じるため排除される。

- (16) a. [[[花子] D<sub>[<κ>]</sub>] [[D<sub>[κ]</sub>] [<D> √食べ-<sub>[ ]</sub>] v<sub>[+CAP]</sub>]] —Transfer→ b. [D<sub>[κ]</sub>] [[D<sub>[κ]</sub>] [<D> √食べ-<sub>[ ]</sub>] v<sub>[+CAP]</sub>]]

従って、収束に至るよう派生を進めることは不可能であり、DOC に違反した使役構文の派生は必ず破綻する。

しかし、直ちに生じる疑問は、何故被使役者が二格で標示されれば派生が収束するのかというものである。(16)と同じ曖昧性は二格被使役者の場合にも生じそうに思える。ここで注目したいのは、韓国語や日本語の水海道方言のような、有生性に於いて異なる与格標識をとる言語の存在である。もし二格の D が  $\kappa$  素性のみならず、少なくとも有生性に関わる素性を含むなら、2 つの終端 D は区別され、正しい再統合が得られる。

#### 6. 結語

本稿では、位相が転送の適用に基づいて定義されるという可能性を追求し、転送を原理的には自由に適用可能とする体系の構築を試みた。実際に観察される適用上の制限は、後統語的操作「再統合」と一般的操作 Σ の挙動に帰することができる。更に、この体系が DOC の存在を正しく予測することで支持されることを示した。

主要参考文献: Chomsky, Noam (2007) “Approaching UG from Below,” *Interface + Recursion = Language?*, ed. By Uli Sauerland and Hans-Martin Gärtner, 1-29, De Gruyter, Berlin. / Chomsky, Noam (2021) “Minimalism: Where Are We Now, Where Can We Hope to Go,” *Gengo Kenkyu* 160, 1-41. / Collins, Chris, and Edward Stabler (2016) “A Formalization of Minimalist Syntax,” *Syntax* 19, 43-78. / Maezawa, Hiroki (2019) “Reconstruction, Cyclic Transfer and Reintegration,” *English Linguistics* 35, 261-296. / Nunes, Jairo, and Juan Uriagereka (2000) “Cyclicity and Extraction Domains,” *Syntax* 3, 20-43.